

同窓會々報

昭和十年度同窓會役員次の如し

會長	院長	望月日謙	院下
副會長	教頭	遠藤是妙	先生
庶務部	部長	鹽田義遜	先生
會計部	部長	田邊正知	君
辯論部	部長	中條是明	先生
文學部	部長	四辻宣宥	君
運動部	部長	松木本興	先生
購買部	部長	古川宣悅	君
	部長	今村是龍	先生
	部長	岡村正雄	君
	部長	林是幹	先生
	部長	草ヶ谷宣慶	君
	部長	望月徳英	先生
	部長	成田正學	君
	部長	米村智淨	君

同窓會々報

幹事の言葉

祖山學院全學生の自治行政機關たる同窓會は如斯のメンバーを整へて本年度の仕事に就いた。

司令部級とも言ふべき各部長諸先生は暫く措き、火線に躍る幹事は孰れも決して練達の經驗者ではない。

我等は光榮の重責を佩びて、先づ己を省み、只最善の方途と正鵠の覺悟とを與へられむことを祖廟に祈つた。

そして、鈍重な我等への啓示は「異體同心なれば萬事を成す」の祖誡よりなかつたが、悲壯な決意と感激との涙に濡れた七人の拳は期せずしてシツカリ握られ、魂のスクラムがガツチリと組まれた。

毛穴からさへ滲み出る愛校の氣迫を漲らせて忍苦の壯途に上らうとする我等の胸底には不滅の聖火が赫々と點された。當初一度、内省により現像された愚鈍と未經験の陰翳は此の聖火に照されて正に一轉、颯爽たる英姿に生れ更つて滿帆の闘志が五体を這ふ。

偕、爰に少しく吾人の心境を分析すれば、そのかみ、宗祖九ヶ年の身延生活に遡る迄もなく、實に祖山の眞價は過、現、未來に涉つて行學の根本道場、本化教育の策源地たる可きに在る。祖師の膝下に末代弘通の鳳雛を哺み育てやうとは我祖在山の端緒たりしと共に、又萬年不易の結論である。

衣食住の凡てに身を以て忍び給へるアレ程の御困苦はそも何

が爲であつたか。眞骨を拜して泣いた玄政の詠歌を漠然たる自家宣傳に使ふ前に吾人は身延の身延たる眞の所以を熟慮し銘記せねばなるまい。

直弟子達に依つて創められた守塔輪番に籠る給仕精神はその儘闊浮妙化の聖なる戰鬪意識と一体二面を爲すものではなからうか。

守塔の身延即本化教育の基点としてこそ祖廟は生きる。

生まれ、祖山學院を愛する我等の純情は少くとも單なる若人の感傷的血氣以上のものだ。

學院に殉せむとの我等の覺悟は宗祖へ捧げた生命の躍動に外ならぬ。

全身に脈撃つ愛校の精氣は信と念との焔心となり外焔となつて、胸裡に燃え盛る魂魄の燈に永久の光を成さしむるであらうことを歎び祈りつゝ、「異髓同心なれば……」の啓示に護られ導かれて我等は能ふる限りの鞭撻を自らに加へて來た。

抑々、同窓會の仕事の如き、之を現在の姿に於て概観すれば、勿論猫の額を掻き廻しをる體の些細事ではないが、そは學院そのものが本然の威容を自ら遠離し余りにも無自覺な哀姿を徒に曝してゐるのだから無理もない。

我等は學院の使命を確知し理想を欣求するが故に己が責務を憤思痛感し、以て仕事への希望と誠意とを伸張し披瀝し來つたのである。

菲才な我等の業績は元より頗る不手際ではあるが、スタンド

プレイでない吾人の眞摯な動きの幾分が學院の榮昌、惹いては祖山光顯の正しき基礎工作の片隅にでも朽ちざる捨石の一塊として埋れ得るならば此れに過ぎる悦びはない。

尙、所懐の辭を收むるに當り筆を新にして、會長視下を初め奉り、役員諸先生、其他各先生、本山當局等の懇切な御庇護と御指導とを謹謝し、併せて先輩諸賢、有縁各位、及び會員諸兄の篤き御後援に對し滿腔の謝意を表するものであります。合掌
(十一、二十 田邊生記)

各部記事

回庶務部

幹事 田邊 正知

悽神第二十號發行(昭和十年一月二十七日)以後の主要事項を記す。

二月二日 旬日に涉つた劍道部寒稽古は多大の成果を收めて本日を以て終了す。

二月十六日 宗祖降誕會及學院創立記念日に就き雄辯大會及び茶話會を開催し意義有る聖日を送る。

三月一日 滿洲國派遣布教師佐藤頭領師の講演あり。同夜の歡迎會に福田、櫻榮兩幹事出席す。

三月十六日 昭和九年度第二十四回卒業式後、高等部中等部卒業生の送別茶話會を開く。悲喜交々の微妙な雰圍氣は生涯を

が爲であつたか。眞骨を拜して泣いた玄政の詠歌を漠然たる自家宣傳に使ふ前に吾人は身延の身延たる眞の所以を熟慮し銘記せねばなるまい。

直弟子達に依つて創められた守塔輪番に籠る給仕精神はその儘闊浮妙化の聖なる戰鬪意識と一体二面を爲すものではなからうか。

守塔の身延即本化教育の基点としてこそ祖廟は生きる。

生まれ、祖山學院を愛する我等の純情は少くとも單なる若人の感傷的血氣以上のものだ。

學院に殉せむとの我等の覺悟は宗祖へ捧げた生命の躍動に外ならぬ。

全身に脈撃つ愛校の精氣は信と念との焔心となり外焔となつて、胸裡に燃え盛る魂魄の燈に永久の光を成さしむるであらうことを歎び祈りつゝ、「異髓同心なれば……」の啓示に護られ導かれて我等は能ふる限りの鞭撻を自らに加へて來た。

抑々、同窓會の仕事の如き、之を現在の姿に於て概観すれば、勿論猫の額を掻き廻しをる體の些細事ではないが、そは學院そのものが本然の威容を自ら遠離し余りにも無自覺な哀姿を徒に曝してゐるのだから無理もない。

我等は學院の使命を確知し理想を欣求するが故に己が責務を憤思痛感し、以て仕事への希望と誠意とを伸張し披瀝し來つたのである。

菲才な我等の業績は元より頗る不手際ではあるが、スタンド

プレイでない吾人の眞摯な動きの幾分が學院の榮昌、惹いては祖山光顯の正しき基礎工作の片隅にでも朽ちざる捨石の一塊として埋れ得るならば此れに過ぎる悦びはない。

尙、所懐の辭を收むるに當り筆を新にして、會長視下を初め奉り、役員諸先生、其他各先生、本山當局等の懇切な御庇護と御指導とを謹謝し、併せて先輩諸賢、有縁各位、及び會員諸兄の篤き御後援に對し滿腔の謝意を表するものであります。合掌
(十一、二十 田邊生記)

各部記事

回庶務部

幹事 田邊 正知

悽神第二十號發行(昭和十年一月二十七日)以後の主要事項を記す。

二月二日 旬日に涉つた劍道部寒稽古は多大の成果を收めて本日を以て終了す。

二月十六日 宗祖降誕會及學院創立記念日に就き雄辯大會及び茶話會を開催し意義有る聖日を送る。

三月一日 滿洲國派遣布教師佐藤頭領師の講演あり。同夜の歡迎會に福田、櫻榮兩幹事出席す。

三月十六日 昭和九年度第二十四回卒業式後、高等部中等部卒業生の送別茶話會を開く。悲喜交々の微妙な雰圍氣は生涯を

通じての心地良き印象として去り行く人々の胸に焼付けられるであらう。閉會後記念撮影をなす。因に第二十四回卒業生は左の如くである。

◇高等部卒業生 十六名(順序不同)

石川健一君、倉橋智敬君、中里是要君、幡上教妙君、望月博愛君、松井泰純君、末吉研秀君、今村義忠君、中澤要實君、畑野惠仁君、日置依法君、佐藤海善君、中村正俊君、佐野英生君、濱崎智研君、松下圓信君

◇中等部卒業生 十六名(順序不同)

深澤豊成君、村上清君、門田正孝君、加藤智學君、田中惠嚴君、太田海豊君、佐野春雄君、熊王慈海君、河村一郎君、幡野存靜君、吉永正彦君、吉田孝存君、四辻宣宥君、小崎龍雄君、高田智誓君、小玉貫淨君

三月二十三日 立正大學本年度卒業生一同影山教授引卒の下に祖廟參拜のため來山。福田幹事不在の爲め櫻榮幹事及び五水井、田邊君等主となつて幹旋に努む。同夜歡迎茶話會を開催。田邊君庶務幹事代理として歡迎の辭を述べ影山教授の挨拶、卒業生代表吉田一君の謝辭あり。次いで主客各々の自己紹介あつて歡談爆笑裡に清新明朗な交歡を盡して會を閉じた。一行は本山に二泊の後、二十五日朝離身、櫻榮幹事、田邊君途中まで見送る。

三月二十五日 若くして惜くも逝つた本年度中等部卒業生小玉貫淨君の葬儀に際し弔電を發して哀悼の微衷を表す。

三月二十八日 校友酒井將敬師の入寺式に就き歡びの意を電波に托す。

四月十三日 本學院助教授若月堯淳師辭任せらる。福田、櫻榮兩幹事身延驛までお見送り申上ぐ。

四月二十五日 昭和十年度同窓會幹事選舉の結果、田邊正知君以下前記の諸君當選。

四月二十七日 昭和九年度同窓會決算報告書を發表す。

四月二十八日 立教開宗の聖日を卜して本年度新入生五拾余名の歡迎茶話會を開催、滿山の新緑は此等新人の前途を表象し咲き誇る櫻花の微笑は純眞な我等の歡びそのものだ。新古一体、以て必ず生身の祖師への誓を守らねばならぬ。

同日、本學院前教授野崎學稼師の御入寺式に就き祝電を發す。

四月二十九日 昭和十年度同窓會簿算案發表せらる。

五月二日 第二十四回同窓會定期大會開催。午前九時閉會宣言先づ望月舜勝教授副會長代理として訓辭あり。次いで正副議長着席(正議長中條是明教授、副議長望月德英教授)直ちに各部幹事の經過報告に移り、之を終つて愈々大會のクライマックスたる各部に對する質疑に入る。多少の波瀾を豫期された質疑應答も中條議長の鮮やかな司會に依り頗る靜穩順調に進行して一旦休憩、晝食後午後の部に入る。

午後一時再會、望月副議長の明快な司會裡に坦々として議事は進む。先づ福田君の舊幹事解任挨拶が述べられ、續いて田邊新庶務幹事の就任の言葉あり。滿場急聲の拍手は重責を果

した者への慰勞と感謝のリズムであり、新しき代表者への希望と激勵の爆發だ。

次いで田邊幹事本年度豫算案を説明し豫算討議に遷つたが無風状態の中に通過、建議案の討議に入り左の一項を決定、一、購買部に對する舊學生の未支拂全部を帳簿より切捨てる事(長谷川寛慶君提出) 續いて緊急動議に入り左記四項を決定した。

一、辯論部細則第十五條第十六條の一部分及び第二十二條を削除する事(幻燈器使用取消しに關する事及び中等部五年級の本妙庵に於ける説教の實施演習中止の事)――岡村正雄君提出――

一、文學部細則第七條第一項へ次の條文を附加する事

「同窓會費三ヶ年完納ニシテ卒業後四年以内ノ者」――櫻榮鍊靜君提出――

因みに文學部細則第七條改訂後の全文を掲げれば、

「第七條 榎神ハ會員一同ニ頒布シ左ノ諸員ニ該當スルモノニ發送ス

第一項 滿三ヶ年以上在學シタル者ニシテ同窓會費三ヶ年完納、卒業後四年以内ノ者

第二項 本會ニ金品ヲ寄贈シタルモノ

第三項 寄稿セシモノ

第四項 本會ニ功勞アリシモノ」

一、運動部細則第一体育部第一條に於て弓術部を廢し卓球部

を加へる事。――小友義猶君提出――

一、購買部に於ける原價發表を取消す事。――五水井榮誠君提出――

續いて種々有益なる希望案の提出ありて、滞りなく議事の全部を終了し、議長解任の後、田邊幹事の閉會宣言を以て大會の幕を閉じた。時に午後二時四十分。

例年兎角意味なき喧騒混亂に終始し、或は言語道斷の泥試合さへ演じ兼ねなかつた本大會がどうやら常規を逸せずして稍本來の面目に還つた觀ありしは洵に慶ぶべきことではあるが未だ同窓會當局及び會員の双方共に同窓會そのもの、趣旨又は仕事に就いては再思三省の余地大いに有りと言ふべきではなからうか。遮莫、幹事の職責が如何に重く且つ辛なるかは實に知る人ぞ知る所。爰に謹んで前年度幹事諸兄の勞を謝して左にその芳名を列記し以て深甚の敬意を表するものである。

庶務部(幹事長) 福田勝義君。文學部 櫻榮鍊靜君。運動部 古屋是聞君。辯論部 葛原榮靜君。購買部 幡野存靜君。會計部 福田幹事長兼任。

五月三日 各部々長決定(前記の如し)

同日、幹事會開催。各部に對し各々任務開始を通告し種々打合せを爲す。

五月六日、七日、八日 釋尊御降誕會に就き辯論部主催の下に大々的道路布教を行ひ多大の法益を收む。

五月十日 幹事會開催、修學旅行に關し協議を行ひ、大体の計畫を樹つ。房總聖蹟巡拜四泊五日の豫定。尙本山參拜部諸身鐵社員諏訪部氏より實際上の指示を受く。

五月十六日 旅行許可願を學院當局へ提出す。

五月十八日 旅行願許可せらる。直ちに旅行計畫表を公表し參加者を募る。

五月十九日 修學旅行に關し生徒各資縁家へ依頼狀を發送す。

同日、各級對抗野球大會舉行、中等部二年級優勝す。

五月二十二日 中等部一、二年級の小旅行に就き各方面と打合せの結果、梅ヶ島温泉一泊徒步行軍と決定發表す。

五月二十三日 旅行先の主なる寺院學校等へ依頼狀を送る。

五月三十一日 旅行案内書印刷、尙該書中鹽田教授の御好意に依り巡拜各聖地に就いての懇切な記事を編輯し得たことを有難く思ふ。

六月一日 旅行參加者五十余名決定。放課後一同校内へ集合、

松木教授より詳細なる御注意を承はる。

六月二日 本學院校友小佐々惠照師遷化、本日本葬に際し弔電を發す。

同日 修學旅行隊出發、(旅行記事參照)

六月六日 修學旅行隊全員無事歸校

本を忘れぬ爲めに發祥の地を踏み、末を亂さぬやうに鶴林を訪ふて以て始終一貫の淨願を完ふせんとした吾人の努力は見事に報いられたのだ。胸一杯の感謝に身心の疲れを忘れる。

尙、中等部一、二年級の小旅行は豫定通り舉行、六月三日梅ヶ島温泉一泊、四日無事歸校、引卒者、望月德英先生及び林是幹先生、下邨君幹事代理として參加、甚だ愉快なりし由、引卒兩先生及び附添者の勞を謝す。

同日、立正中學五年級生徒、教員以下五十四名來山、田中先生田邊、草ヶ谷兩幹事、驛まで出迎へる。幹事全部及び學生多數三門にて一行を歡迎し、午後米村君外學生二名附添ひ奥ノ院思親閣へ案内す。夜、大客殿にて同窓會主催の歡迎會を催し、松木教授列席せらる。田邊幹事歡迎の辭を述べ、遂には中學生らしい朗らかな隠し藪まで飛出して打融けた氣分の裡に閉會。

六月七日 立正中學生出發、田邊、古川兩幹事驛まで見送る。

六月九日 春季庭球大會舉行。

六月十日 修學旅行決算報告書發表。アレだけの充分な旅行が一人金七圓七十錢の僅額で出来たことは僥倖といふも過言でない。尙、貴重な淨志を御資授下さつた法主猊下、本山當局立正大學及び同中學、日暮里善性寺殿に謹んで滿腔の謝意を表す。

六月十五日、十六日、十七日 宗祖御入山開闢會に當り毎夜辯論部の道路布教盛大に行はる。

六月二十三日 中山學林生教師以下九名來山、午前六時三十分身延驛着、田邊、四辻兩幹事出迎へ、本山にて朝食後諸堂及び西谷參拜、四辻幹事、下邨、齋藤、權の諸君附添ひ七面山

登詣、午後十時歸宿す。

六月二十四日 中山學林生出發、田邊、草ヶ谷兩幹事見送る。

六月二十九日 林是幹先生、勤務演習の爲め津田沼鐵道聯隊へ出發さる。田邊、古川兩幹事驛までお見送り申上ぐ。

七月五日 第一學期試驗開始

七月九日 試驗終了

七月十一日 成績發表、終業式

同日 幹事會開催、第一學期に於ける各部行務の締括りと來學期の準備打合せを爲し暑中休暇に入る。

八月二十五日 本學院前學監故冷泉要淳上人の密葬儀に就き弔電を發し謹みて哀悼の意を表す。

八月二十九日 大阪立正學院資徒十三名登詣、岡村、四辻兩幹事接待に努む。夜、茶話會を催して行を搞ふ。

八月三十日 立正學院生、奥ノ院、七面山登詣、成田幹事米村助手の兩君案内の勞を採る。

九月一日 第二學期開校式舉行。

第二學期の開校と同時に、同窓會の仕事も愈々正宗分に入る。未曾有の緊張裡に終始した始業式の雰圍氣は若き法子等への限りなき慈鞭であり、盡きせぬ明日への希望を孕ますに充分だ。院長侃下、御垂訓の一言一句は温嚴宜しき隨つて悉く吾等が肝に銘じ、時に只管慚愧内省の涙抑へ難く、且つは蹶起勇猛の精氣を呼んで合掌の十指爲めに微妙の感動に震へし者敢て愚生獨りのみではなかつたであらう。降りに降る天地の

鬱陶しきは明澄といふ秋の概念には凡そ似てもつかぬ惨めなものであつたが、學期の首途に赫々と差し込むだ心の太陽は閉された吾等の六識をスツカリ開いて、感覺以上の秋の眞髓を満喫し得る期待と歡びに浸る幸ひを恵んで呉れた。二百の沙彌の此の心根は、祖山學徒の此の心意氣は、とりもなほさず同窓會そのもの、心境である。

九月二日 幹事會開催、本學期各部諸行事に關する計畫の大綱を樹て互に奮闘精進を誓ふ。

九月三日 各部共一齊に活動開始。

九月二十日 幹事會開催、各部事業計畫の大綱に就て更に充分なる検討を行ひ慎重なる耐氣を以て萬全の策を練る。

九月二十四日 本會運動部の野球チームは今シーズンの第一戦を身延クラブの間に行ひ徹底的に之れを粉碎して幸先良きスタートを切る。

同日 身延教報十月號所載の同窓會記事を執筆、編輯部に送る

十月一日 勅額拜戴記念會。

同日 村雲日淨侃下、宗祖御更衣式參列の爲め御衣を奉じて御登山遊ばさる。學生一同三門前にて御出迎申上ぐ。

十月二日 村雲門跡より本會に宛て金一封を下賜さる。

十月五日 秋季卓球大會舉行。

十月十二日 宗祖御繫湊會に當り辯論部主催の通夜説教を釋迦堂にて行ふ。未曾有の盛會、歴史的の記録を作る。

十月十三日 通夜説教出仕者を招いて慰勞會を催す。

十月十四日 聯合雄辯大會準備の爲め田邊、古川兩幹事甲府へ出張。

同日 秋季庭球大會舉行。

十月十九日 第十回聯合優勝雄辯大會（午後七時より身延町公會堂に於て）開催。諸事都合良く正に劃期的大盛況裡に有終の美を結んだ。

同夜 閉會後、參加學校各辯士を招待して盛大な交歡慰勞會を催し、松木部長に記念銀盃を謹呈す。尙松木、中條、望月（徳）、林、各審査員諸先生の御盡瘁を深謝す。

同日 佐賀縣妙圓寺前田龍存上人より金五十圓本會に惠與せらる。御芳志のほど感謝に堪えず。

十月二十日 田邊幹事内房本成寺に於ける前學監故冷泉上人の本葬儀に參列親しく靈前に額き弔詞を呈す。

十月二十一日 田邊幹事各部諸用を兼ねて甲府へ出張、劍道防具新品二組別に小手新品二組購入。

十月二十二日 冷泉上人納骨式舉行、遺弟御一同より金五圓、本會に寄附せらる。

十月二十三日 身延中學校運動會の招待を受け田邊、草ヶ谷兩幹事出張參觀す。

十月二十四日 身延教報十一月號所載同窓會記事執筆編輯部へ送る。

十月二十六日 池上學林生徒、引卒者以下十六名來山、午前十一時三十六分身延驛着、田邊、草ヶ谷兩幹事出迎、中等部一

年級全員三門前に整列して一行を迎へる。本山にて晝食、午後諸堂參拜、學院及び寄宿舎見學、それより西谷祖廟參拜、終りに深敬病院を參觀して本山に歸る、夕食後、新食堂に於て歡迎茶話會を開く、松木、田中、武田三教授出席さる。松木先生の含蓄ある歡迎のお言葉は彼等に何ものか大きな覺悟と示唆を與へたであらう。

十月二十七日 池上學林生一同朝勤參列後七面山登詣を雨に阻まれ奥ノ院のみに止める。瀧澤君の案内で雨中、思親閣參詣午後零時二十八分身延驛發にて歸京、田邊幹事見送る。

同日 秋季劍道大會を行ふ。

十月二十九日 立正大學辯論大會へ淺野猛君出席。

十一月一日 休學中の中等部四年生岩崎龍雄君死去、本日葬儀に當り弔電を以て哀悼の誠を致す。天、才人に齡を借さずか嗚呼。

十一月二日 池上學林辯論大會へ宇佐美鍊昌君出席。

十一月三日 身延小學校秋季運動會に招かれ、田邊、岡村兩幹事出席參觀す。

十一月八日 校友深澤海晃師入山式に當り祝電を發す。因みに同師は昭和六年度本會庶務部幹事たり。

十一月九日 運動部野球チーム、峽南軟式野球大會へ出場。

春以來の悲壯な精進が果して實を結ぶか、勇闘空しく散り去るか、連敗三年の雪辱を此の一戦に賭けて必勝を期する各選手の意氣は素晴らしい。（運動部記事参照）

十一月十日 野球部峽南大會第二次戦に出場(運動部記事参照)
 十一月十一日 午後三時より前日に引續き優勝戦を行ふ。遂に多年の宿望を達して榮冠を獲得す。選手諸君の勞を多とすると共に殊に草ヶ谷幹事の熱心と主將宮本君の奇蹟的好投、捕手河南君の好打好守を讃歎して其の功績を特記しやう。(運動部記事参照)

同夜、同窓會主催の野球部祝勝慰勞會を催す。

十一月十三日 本學院生にして本年度現役兵として徴收される者の爲めに其の榮譽を讃へ、行を旺ならしむべく記念品を贈ることに決定、準備の爲め庶務幹事甲府へ出張す。

十一月十五日 入營勇士への祝禱詞を發表す。

祝 禱 詞

我が祖山は今年、四人の同志を國軍に送ることになつた。亞細亞の光、否、世界光被の聖使命は大日本建國並びに存榮の眼目たると共に、大ニチレニズムの根本的指導原理だ。日連の股肱を日の本の聖天子のソレに捧げる吾等の感激は、まこと超俗的法悦の大交響樂だ。非常時の嵐は未だその閃きを消してはゐない。同窓會は祖山學院全學生の名に於て吾等の勇士を祝送し、完全無欠の御奉公を致されむことを熱禱するものである。尙ほ、吾人の誠意を表象して左の如く記念品を贈る。

一、銀 盃 (各一個)

吉永正彦君(關東軍自動車隊)、安松登志美君(佐世保海兵

團)、五味義文君(野重第一聯隊)

一、歡送旗一旒(本人の希望に依り他と品目を異にす)

秋山樸三君(滿洲獨立守備隊) 以上

十一月十六日 吉永正彦君入隊の爲め出發、午後五時身延驛發田邊、四辻兩幹事見送る。

十一月十七日 購賣部賣品盜難事件發生、價格約六十圓、相當經驗ある者の犯行と認めらる、取敢へず、直ちに本山各寮及び寄宿舎を捜査せしも見當らず。已むなく事を公にして警察に届出づ。證據材料不充分にして犯人捜査極めて困難なり。不可抗力に依る珍事とはいへ責任を痛感して憂苦局りなし。

萬般の順調にあたら汚点を印せしかと思へば悲憤の涙抑へ難し、好事冤多しか、只人事を盡して天命を待つのみ。

十一月二十日 全學生連署の昇格歎願書、教授會に提出せられ之れを通過す。本問題は學生各個、身に當る大事ではあるが會務の範圍に非ず。由つて記さず。

十一月二十六日 本學院青年學校教練査閱の案内狀を本會の名を以て支院、學校、官公吏、各種団体等に配付す。

十一月二十七日 幹事會開催、購賣部盜難事件其後の經過報告を爲し善後處置を協議す。更に本學期に於ける各部分務執行後の整理をも併せ行ふ。以上を以て本年度棲神發行直前に至る迄の庶務部記事とする。明年四月の任期滿了までには猶多くの仕事が残されてゐる。愛校の血潮の滾るに任せて、存分に犬馬の勞を盡させて貰はう。大方諸賢聖の御清授を乞ひ奉

る。合掌。

—一〇、一一、末日記了!

回會計部

幹事 四辻 宣宥

「惜い腹から可愛い孫が出来」とは下世話の川柳ではあるが、よく人情の妙を諷し盡してゐる。

會計と言ふ役は必要缺くべからざるものではあるが、さて會費支拂の期日が迫るとわけもなく憎くなる、然し乍ら惜い腹と云ふ嫁の會計部が同窓會各部の性能を完全に發揮せしむるところの原動力となるのだ。

本年も例に漏れず學生諸君から見れば實に惜い嫁ではあつたらうが、各部共に盛大にその事業をなし遂げ得たと云ふことを以て満足せられん事を乞ふ。

寄附者芳名

金一封	村雲 尼公 貌下
金五拾圓也	前 田 龍 存殿
金五圓也	本 成 寺殿
金五圓也	神 田 義 法殿
金參圓也	立 正 學 院殿
金貳圓也	梅 屋 旅 館殿
金壹圓也	松 司 軒殿

(文學部寄附者芳名は文學部記事参照)

同窓會々報

回辯論部

幹事 古川 宣悅

本部五月以降現在に至る間の消息左の如し。

五月六日より八日に至る三日間の釋尊御降誕會を期して身延町に於て道路布教を行ふ。當日の辯士は、

六日 小崎若雄君、古川宣悅君、松木辯論部長(雨天の爲め後中止す)

七日 小崎若雄君、久住龍騰君、葛原榮靜君、松木辯論部長、結城本山布教師(山門前に於て)、小崎若雄君、今井是觀君、古川宣悅君、松木辯論部長(玉屋の前に於て)

八日 古川宣悅君、福田勝義君、武内海正師、田中靜光君、松木辯論部長(山門前に於て)

小崎若雄君、久住龍騰君、今井是觀君、結城本山布教師(玉屋の前に於て)

五月廿五日 本年度第一回辯論會を本學院講堂に於て開催す。辯士及び演題は左の如し。

- 一、開會の辭 古川 幹事
- 一、所 感 中一 塚原 利道君
- 一、靈峰の尊さに覺めよ 中二 西村 敏一君
- 一、所 感 中二 近藤 忠吉君
- 一、余が崇拜する偉人と其の言動 中五 松岡 堯雄君
- 一、雄辯發達の必要 中四 下邨 顯淨君
- 一、所 感 中四 安松 登志美君

- 一、所 感 高一 太田 豊君
- 一、自ら性あるものを轉ぜよ 高一 眞野 義一君
- 一、所 感 高一 三好 詮肇君
- 一、祖廟中心主義を提唱す 高二 葛原 榮靜君
- 一、鹽澤の山の中より馳せ參じて 高三 渡邊 信覺君
- 一、閉會の辭 田邊 幹 事

六月十三日 第一學期各級選出雄辯大會を午後一時より本學講堂に於て開催、部員の一大獅子吼に依つて盛大裡に閉會す。プログラムは左の如し。

- 一、閉會の辭 古川 幹 事
- 一、若人よ信仰に立て 中一 兼子 春靜君
- 一、微笑を求めて 中二 杉山 寶淳君
- 一、大和民族の使命 中三 田村 啓孝君
- 一、日蓮聖人の人格を提唱す 中四 笹川 行順君
- 一、行け聖旗の下へ 中五 宇佐美 鍊昌君
- 一、非常時の再認識 高一 三好 詮肇君
- 一、眞の佛教復興 高二 松本 良溫君
- 一、所 感 高三 今井 是觀君
- 一、挨拶 部長代理 福島義 孝先生
- 一、閉會の辭 田邊 幹 事

閉會後福島部長代理を始め當日の各級選出辯士及び各幹事參集の下に批評會を行なひ得る所多大なり。

六月十四日 三光堂の祭日に當り野田學惠、佐藤學善の兩君を

派遣す。

六月十五、十六、十七日の三日間宗祖御入山會に當り、道路布教を舉行す。並に二王門内に於て子供會を行ふ。

十五日 古川宣悅君、武田海正師、今井是觀君、松原師(本山) 福田勝義君

十六日 古川宣悅君、久住龍騰君、松原師(本山)、青木孝勝君 武田海正師、田中靜光君、松木辯論部長

子供會の部

淺野詮勇君、井田壽導君、齋藤威遠君、長谷川泰溫君、古川

宣悅君、久住龍騰君、小崎若雄君

十七日 雨天の爲め中止す。

十月十二日 宗祖鶴林會に際し午後六時より釋迦堂に於て通夜

説教を行ふ。當夜三百に餘る善男善女堂内に滿つ、かくの如く

參詣者の多き事は近年稀なり。

説教順番左の如し。

久住龍騰君、佐藤學善君、野田學惠君、丸山本山布教師、武田

先生、小松師(武井坊内)、青木孝勝君、松原師(本山)、福田勝

義君、淺野詮勇君、小崎若雄君、如是信君、松本良溫君、三好

詮肇君 以上

十月十九日 身延公會堂に於て午後六時より十週年記念優勝聯

合雄辯大會を開催す。此の日立正大學、池上學林、立正學院、

尼ヶ崎學林、法苑學院、身延男女青年並びに吾が學院各選士等

々母校の榮譽を双肩に擔つて、勇躍參加したる代表辯士は實に

二十有四名の多きに達した。各校代表者が絶叫せる火の如き雄叫びこそ宗教復興の曉鐘でなくてなんであらう。その純真にして熱誠溢るゝ大獅子吼は何れも皆宗門の前途を照し、響ぶべき方途を嚆矢する道標たるべきものであつた。斯く創立以來の盛大裡を得た事は是れ辯論道に目覺むるの傾向と斯道隆盛の機運に直面して居る事を如實に物語るものである。

本年度より本部は辯論道向上の一助に資すべくクラス對級優勝者を決定し銀カップを順廻する事にせり。審査員には、松木本興部長、中條是明先生、望月徳英先生、今村是龍先生、林是幹先生、參加學校優勝者は法苑學院中山經明君、祖山學院各級優勝者は中五選出宇佐美鍊昌君であつた。因に當日のプログラムを示せば左の如くである。

- | | |
|------------------|--------------|
| 一、唱 題 | 一 同 |
| 一、開會の辭 | 幹事 古川 宣悦君 |
| 一、審査員挨拶 | 本學教授 中條 是明先生 |
| 一、朋友の感化 | 本學院 望月 正利君 |
| 一、黒人と白人は何故争ふ | 本學院 村田 力男君 |
| 一、神性の閃き | 本學院 田村 啓孝君 |
| 一、身延町經濟更生の根本 | 男子青年 佐野 三郎君 |
| 一、大偉人の出現を望む | 本學院 瀧澤 正人君 |
| 一、非常時の一斑 | 女子青年 志村 八重嬢 |
| 一、人生のオアシスを求めて | 本學院 宇佐美 鍊昌君 |
| 一、正しき信念を本として團結せよ | |

- | | |
|------------------------|--------------|
| 一、個人主義を排撃して報恩謝徳の念に生きよ | 法苑學院 中山 經明君 |
| 一、今我國の欲求して居る宗教の本質をたづねて | 尼ヶ崎學院 三浦 泰哲君 |
| 一、祖廟中心の制化を主張す | 本學院 伏見 儀惣治君 |
| 一、女性の守るべき道 | 池上學院 對馬 秀達君 |
| 一、打て三大誓願の警鐘を | 女子青年 望月 みさを嬢 |
| 一、日本主義を提げて | 立正學院 田中 春玉君 |
| 一、アメリカに使用して | 男子青年 池上 正君 |
| 一、宗教復興に題す | 立大豫科 古谷 莊一郎君 |
| 一、新興宗教と本化門下の覺悟 | 本學院 掛橋 泰壽君 |
| 一、人間萬事寒翁が馬か | 立大専門部 梅溪 英學君 |
| 一、祖廟中心主義 | 立大専門部 柳井 隨學君 |
| 一、身延青年よ錦を他郷に求むる勿れ | 立大本科 永江 義宣君 |
| 一、所 感 | 本學院 今井 是觀君 |
| 一、宗教生活に於ける生命の潤度 | 先 輩 三木 淨達兄 |
| 一、挨拶 | 先 輩 矢谷 惠宏兄 |
| 一、閉會の辭 | 辯論部長 松木 本興先生 |
| 一、唱 題 | 幹事 田邊 正知君 |

十月廿九日 立正大學雄辯大會へ淺野詮勇君を派遣す。
 十一月二日 池上學林雄辯大會へ宇佐美鍊昌君を派遣す。
 尚ほ第三學期雄辯大會を本學講堂に於て行ふ豫定なり。此等の
 外山内布敷、耕辯會、特別布敷等々記すれば多けれども余り煩
 瑣に流るゝを以て省略す。
 —昭和一〇、一一、二四—

回運動部

幹事 草ヶ谷宣慶

本年度に於ける運動部各部記事次の如し。

◇劍道部

秋季校内大會を十月二十七日午前十時より開催す。此の日運悪く雨天なりしが劍士多數出場す。

審判 中村三段

紅白戦 全て三本勝負

白軍 齋藤、久保、良く紅軍を倒したれど大將小川に敗れ續く
 白軍副將出島、大將藤井又共に敗れ去り遂に勝利は紅軍に歸す
 小川の健闘賞すべし。
 リーグ戦

甲組 三級以上
 一 小川君
 二 藤井君
 三 出島君

乙組 四級以下
 一 鈴木(新)君
 二 前田君
 三 片岡君

優勝戦

一等 出島君、二等 麻生君、三等 前田君

優勝戦は抽籤の結果一回戦で副將小川と出島劍士と當り小川惜

しくも敗れ、二回戦には久保、前田、出島、藤井、麻生と残り
 抽籤の結果麻生不戦一勝となりて前田、麻生、出島の三劍士は
 リーグ戦に依つて順位定まる。

斯くて賞品授與及び部長の挨拶ありて無事大會を終了す。

◇卓球部

十月五日校内大會及び峡南派遣選手決定試合を午後一時より校
 内講堂に於て開催す。

クラス戦

一等 中二 齋藤君
 二等 中五 宮本君
 三等 高二 永瀧君

個人優勝戦

一等 藤君、二等 齋藤君、三等 鈴木(新)君、四等 笹川
 君、五等 増田君、六等 大澤君

依つて選衡の結果A、Bと二組に分け十月六日の大會に派遣す
 A組 藤君、小友君
 B組 齋藤君、大澤君、増田君

十月六日 峡南大會の結果A組は敗れ、B組は奮戦の結果四等
 に入賞す。而して明年の大會にはと必勝を期して意氣込んで居
 る故、選手各々自重して大いに練習せられんことを！

◇庭球部

六月九日午前九時より春季校内大會を開催す。天氣晴朗なり。

紅白戦

白軍 高尾、葛原組奮闘良く紅軍を倒す。

クラス戦

- 一 等 中一 天ヶ瀬、竹谷組
- 二 等 高三 高尾、淺野組
- 三 等 高一 加藤、窪塚組

優勝戦

- 一 等 天ヶ瀬、竹谷組
- 二 等 中川、齋藤組
- 三 等 草ヶ谷、鈴木組

十月十四日御大會休暇を利用して秋季大會を開催す。此の日部長林先生も出場されて奮戦せられたり。

紅白戦を廢し本山對厚德寮の對抗戦を行ひ厚德寮辛勝す。クラス戦

- 一 等 高三 {小野 高尾} 二 等 中五 {增田 香川} 三 等 中一 {天ヶ瀬 竹谷}

- 一 等 {秋山 小野} 二 等 {竹谷 葛原} 三 等 {高尾 加藤}

依つて昭和十年度秋季大會の優勝者たる(秋山、小野組)に優勝旗を授與す。

野球部

今年度は今迄と違ひ卒業生を多く送り出した爲選手少く新人が大半を占め居れ共凜と張る新陣容は峽南野球界制覇の第一候補として熱氣溢るゝばかりである。殊に監督として田邊、草ヶ谷兩君を始めバッテリは宮本、河南の兩君の名コンビと鐵の統制下にあるナインは全く比類無きもので、正に黄金時代と言つ

ても過言ではあるまい。

五月十九日 級對抗野球戦を舉行の結果中二優勝す。バッテリ一齋藤、河南兩君。

第二學期に入りて、いよゝ本格的に練習を始め、一路峽南大會の榮冠を目指して奮進した。

九月廿四日 午後三時より身延町野球團と對戦の結果、春以來待機の形に有りし各選手は存分にその威力を發揮し遂に二十八對一の壓倒的スコアにて大勝す。續いて十月六日身延中學校グラウンドに於て大河内チームと對戦し九對七にて快勝す。

十月廿日 再び大河内チームと對戦せしが、前日の辯論大會の疲れ等の爲元氣無く、延長十一回遂に健闘空しく五對三にて本學始めて破る。

十一月二日 於中學校々庭身延混成軍と對戦二十對一の一方的試合で樂勝す。

十一月三日 三度大河内チームと對戦す。復讐戦としてその意氣凄く十二對五にて雪辱成る。

十一月九日 遂に待望の峽南大會の日は來た。各選手の意氣いやが上にも上がり、抽籤の結果、身延オールスター軍と對戦二對二にて延長戦に入れば本學猛然蹶起し、草ヶ谷君のホームスチール見事に極まり、續いて河南君もホームを陥し入れ二点を

得、遂に四對二のスコアにて押切り翌日の準決勝に出場の資格を得た。

十一月十日 準決勝は抽籤に依り昨年の優勝チームたる堅陣の

聲高き宿敵蹴澤と對戦し、我が軍の天才投手宮本君の素晴らし
い剛球と見事なチェンジオアブースは常に打者の鋭鋒を躰し、
八對三にて見事に之れを撃破して積年の怨を晴らす。續いて優
勝戦に入り陸合、市川と強敵を破つた驛前大河内チームと決戦
し、一對一のまゝ延長戦に入り大接戦を續けたが日没の爲勝敗
つひに決せずドロンゲームとなり、翌日午後三時開始と決定す。
十一月十一日 決勝戦。此の日天氣晴なれど少しく風強し。
覇權爭奪の決戦を見んものと觀衆數百兩軍の應援團は早くより
グラウンドに陣取つて互ひに氣勢を擧げる。

本學先攻にて試合開始後一点を得れば敵又二点を返へし、五
回まで一点を勝ち越され居りしが六回表田邊君のタイムリーヒ
ットに一擧二点を入れ俄然我軍のリードする所となり、七回に
入るや我軍敢然と鋭い急速攻に出で見事なヒットエンドランの
續出にて相手投手をナックアウトし四点を入れ遂に七對二にて
強敵を征服し遂に凱歌を擧ぐ、正に狂氣亂舞、手の舞足の踏む
所を知らず、さながら昂奮の坩堝と化し、祖山ナインは應援團
に守られて、優勝旗を先頭に暮色みなぎる戦場を後にした。

嗚呼！省りみるに野球部創設以來臥薪嘗膽爰に四星霜、始
めて覇權は我手に歸した。

連日三日に亘り勝敗の鍵を握るバッテリー宮本、河南兩君の
奮闘大いに賞すべく前後三日間四試合のハードワークを頑張り
通した。その意氣！その氣慨！只々驚嘆に値ひする。

大會最優秀打者 河南君

本年度活躍せしメンバー

邊谷 本南 邊田 谷谷 木原 條田 藤柳 村
田 草 宮河 田山 竹草 鈴梅 四門 後青 西

監督 投手 捕手 一二三遊 左中右補

以上の如く大体各部に就き述べた如く本年度は學院創立以來未
だ嘗て無き大活躍を試み、荒波を押し切つて優秀なる成績を擧
げ得た事は誠に感慨に堪えぬ。たゞ遺憾なことは現在の學院生
の一部に於て猶ほ運動せる者を見て「いつ迄もいゝ年をして」
と云ふが如き愚言を吐くを良く耳にする事であるが此れ全く自
己のスポーツに對し理解無き事を自ら宣傳して居るものである
墨染の僧衣を身に着ける故なるか。予はたゞその偏見を笑ふ
！而して更に運動をする競技者自身にも、より以上の熱心さが
望みたい。

劍道部は苦しい豫算の中より特に防具二組小手二組を新調し
た。來るべき寒稽古には多數部員の出席を希望し併せて武士道
の名譽の爲めに一大奮起あらんことを望む。

庭球部も學校内のみに萎縮せずもつと對外的に進出したかつ
たが豫算少額の爲望みを果せなかつたのは残念だつた。

卓球部は峽南大會に敗れたりと雖も來年度の大會を目指して
毎日熱心に練習して居る、やがて勝利の榮冠は彼等の頭上に輝
く日も近い事であらう。

猶部員諸氏によつてピンポン台を造つて下さつた事を謝す。

野球部は練習の効現はれ待望の優勝は出来たれ共、未完成の選手多数にて未だ充分ではない。來年度は全國大會に進出する爲に大學級選手をコーチに迎へる故その活躍は大いに期待出来るやう。

競技部は今迄運動會の爲の部であつて獨立しては居らなかつた。而し毎年十月には峽南陸上競技大會に出場する者が多數に上るのだから明年は新設したく思ふ。

終りに臨んで院長現下に於かせられてはスポーツに對し深き御理解を寄せられ各大會に際しては多大の獎勵金を下されし事を爰に厚く御禮申上げ次第であります。(草ヶ谷記)

房總旅行記

(六月二日) 若葉の香高き六月、我が祖山の健兒五十名は、過ぎし日の聖者が血涙に咽んだ、貴い聖蹟を訪ねべく、望月、田中兩教師に引卒せられて、修學旅行の途に上つた。

午後五時夕闇せまる山門に集合して、道中の無事を祈り、一行はやがて中條、林兩先生に見送られ、希望に燃える吾々を乗せた。列車は一路甲府へと、黄昏の中を進む。車窓より望む思親の峯は、次第に夕闇の中に消えて行つた。「世界よりも大なる日蓮を生める」と樗牛が言つた聖人の靈蹟を訪ねんとする若人の心は躍る。甲府發十一時廿五分、新宿行きの列車に乗る。

列車は閻路を縫ふて、東都に走る。淡い夢から覺めると、八

王子驛だ、東の空も白み出し、立川あたりから、新緑の木立に包まれた文化住宅がチラホラと見えて來た。スタンプ集聚連は血眼になつて、次の驛を待ちかまへてゐる。

(六月三日) 五時新宿驛に着いた、ホームには學友、三木、中里兄が笑顔で以て迎へてくれた。吾々は霞んだ都の大氣を満喫し乍ら、ホームを歩いた、日暮里行きに乗替へる、日暮里から常盤線に乗替へるに少し時間があるので、善性寺を訪ねた。折柄小港御留錫を終へた院長現下に御目にかゝり、親しく御言葉を賜る。一同同寺の御厚待に厚く感謝し六時廿分同驛より成田線へ乗替る。

列車は一條の鐵路により深緑の平野をひた走りに走る。轉々と變り行く春の野の景を車窓に賞翫しゆく快樂は蓋し旅行に非ざれば味ひ難きことである。

八時半成田驛に下車し、不動様で有名な成田山を見物する。成田町は身延あたりの穢い町に比べると、都會風に洗練されて感じが良い、バスから下りると、誰だか大きな聲でお題目を唱へた。豆をあさる鳩は驚いてパツト飛び上り肯空を飛び廻つた石段の右側の小さい池には、大小の龜が水面に頭をもたげてゐた。寄附金額の刻まれた大小の石碑が彼方此方に林立してゐる。新勝寺の伽藍は雄大だが一山全体は人工美が過ぎて、森嚴味が失せてゐる。

十時三十分佐倉に向ふ、佐倉驛では時間の余裕があつたら義人宗吾の靈蹟を尋ねたかつた。佐倉驛で少憩し茂原山に向ふ、

遠い彼方の森に宗吾堂が高く聳えてゐた、青田の中に打立つてゐる藁葺の農家は今も尙疲弊のどん底にうごめいてゐる様だ。

零時二十分茂原驛に下車し茂原山に踵を運ぶ。藻原寺の開山は身延二世日向上人で開基は茂原の領主、齋藤遠江守兼綱である。門前に檀信徒がボン／＼と團扇大鼓をたゝいて迎へてくれた。支那風の建築美を帯びた、コンタリートの山門も物珍しい。一行は諸堂参拜の後、客室で聖趣味のタツプリな庭園を眺めつゝ、茶菓の饗應にあづかる、吾等は心からなる當寺の厚志を謝して二時五十分發の列車へと急いだ。

空は愈々明朗に晴れ渡り吾等の意氣はクライマックスに達した。外房州あたりから一刷毛の紺青を平らに流したやうな、渺々たる太平洋が左窓に展開され、處々にしろがねの細鱗が躍つてゐる。右窓の彼方の村々を縫つて流れる白銀の一線……深緑の山……紺碧の小湊灣……それは大自然の水彩畫だ。

小湊驛に一つ手前の大津驛に梅檀林生二名と學友石川君が出迎へてくれた。

廳で小湊驛に着く。誕生寺の方々や學林生が御多忙にもかゝわらず驛まで出迎へてくれたことは、感謝に堪えなかつた。バスに分乘して誕生寺に向ふ、途中宗祖出郷の折、回顧したまへると云ふ御聖跡見返りの高生寺に詣で、次で綿帽子で有名な、岩高山を尋ねる、村の街道を北に數町程細道を登つて行くと嶺岡山の麓が「法々華經」と啼いてゐた。大聖人が小松原に於て東條景信の爲に眉間に疵を蒙り此處の岩窟に休息し給ひる時、

一老婆が大聖人の疵を心配して綿帽子を被らせたと言ふ舊蹟である。踵をめぐらして、大聖人の御兩親の御廟所、妙日山妙蓮寺に詣でる。霧ふかき、身延の澤に於て、「今一度父母ノ墓ヲモ見シ」と大聖人の墓はせられし、御兩親の御墓が此處かと思へば感慨無量である。何時しか夕陽は渺々たる東海に光を投げ、海士が家からは夕靄に包まれて、ゆら／＼と炊烟が立ち昇つてゐた。一行は一路誕生寺へと急ぐ。誕生寺は日本が産んだ大聖日蓮降誕の地を永遠に記念すべく健治二年、聖人の法弟日家上人に依つて開創された古刹である、翠綠滴る小湊山に圍繞せられ前方は太平洋に面し、風光いとひ、歴史と言ひ、傳説といひ實に三拍子揃つた靈地である。潮風にさらされた山門と祖師堂は夕闇の中に巍然と聳え、崇敬の念を深からしめる。庭前には大聖人の若かりし當時の銅像が建つてゐた。一同は本堂にぬかづいて讀經し、後ち諸堂、寶物等を拜觀、老貫主様に御對面色々と有難き御言葉を賜り新築の貴賓室等を參觀し終つて大客殿で旅装を解いてくつろぐ。六百五十遠忌で大多志にもかゝわらず旃檀林生一同は夕食後、吾等の爲に心づくしの歡迎會を御催し下された。吾等は此の温い歡迎の意を高鳴る胸に一杯にみたし十一時、磯づたひに千鳥啼く小湊の夜に夢路を辿つた。

(六月四日) 生憎の雨が降る。波浪高くして、妙の浦に遊ばれぬことは遺憾だつた。七時、祖師堂前で記念撮影をし祖師拈籃地と稱せらる妙の浦を見物に向つた。裏山の細道はズル／＼として歩きにくい。雨は愈々強く濱風はビュー／＼と吹いて身

に着けた油紙は千切れて飛ぶ、文字通りのズブ濡れだ。海嘯の爲めに海に沈んだ御誕生地は今五色の眞砂で彩られ、白浪が此の聖地を洗い淨めてゐる。吾等は誕生寺に滿腔の謝意を述べ八時十分同寺よりバスに分乗して聖地小湊に別れ、清澄山に向ふ。途中水族館を見物し、バスはエンヂンの音高く清澄山への坂道を上る。昔、不思議律師が遊歴した清澄山は樹木鬱蒼として摩尼殿は高く雲表に聳え、古刹の余韻を傳へ岩苔は深く銷て聖者默想の蹟も偲ばれてなつかしい。摩尼殿の後には、血に染んだ班の笹が生々として聖人の苦學を偲ばせる。傳説で有名な左甚五郎作の牛はすゝけた庫裡の入口に鎖でつながれてゐた。庫裡の南には老杉が天を蔽ふばかりに枝をひろげて聳えてゐる傍には苦むした石垣に圍まれて、道善御房の御墓が雨にぬれて淋しく立つてゐた。世間に入れられない思想の所有者として、最愛の弟子を寺から追はねばならなかつた道善御房の心は如何ばかりだつたらう。然し聖人は法戰の巷に立つても身延の澤に芥を摘んでも、師の恩を片時もお忘れにならなかつた。聖人の此の御恩の教を深く体得すべく登つた吾等は煙雨の中に佇ずんでしばし唱題を續けた。樹木の繁る路を東に五六町登ると開教の發祥地たる旭が森だ。寄せくる風は勢をそへ、土砂降りの雨は横ざまに聖人の銅像に叩きつける。此處が建長五年四月廿八日の朝雲を排き曉々としてゆるぎ出づる日輪に向ひ立教開宗を宣言し給える靈峰かと思へば今昔の感あらたなるを覺え、唯感激の中に往時を追懐したのであつた。

「持佛堂の南面にして、午の時此法門申しはじめて」容れられず四面楚歌の聲を聞きつゝ、山を降り給ふた聖人の御心を想起しつゝ、十時十分再び車中の人となつた。

小松原 芽茸の三門前にバスが止まると奥深き老松に圍まれた此の靈地の静かさが吾等の心を一層引きしめる。法華經の故に肉破り骨碎きし兩上人の殉教を想起すると悲想の思ひが薜々と胸を衝く。境内の中程に横の太木がある、聖人は此の木で景信の毒刃を受けられたと言ふ。枝を擴げて靈地の上に翳してゐる形が神秘的だ、吾等は鮮血の滲んだ地に建立された祖師堂にぬかづいて心から殉教の上人に法味を捧げ終つて、當寺の寶物等を拜觀した。ボタ餅の御供養にあづかる。十一時一同此の御厚遇を感謝し、鴨川驛にバスを向ける。鴨川で思ひ／＼に晝食を濟し、今日の猛雨にもかゝらず、清澄山や小松原と御案内して下すつた、旃檀林の藤本先生に厚く感謝し鴨川驛を發して下總の中山に向つた。

五時十分、中山驛に着く、學林生の出迎へを辱ふし、法華經寺へ急ぐ、大きなセンベイや色々の土産物を賣る門前町を通ると、山門だ、身延とは又異つた型をした山門をくゞると、右側に儼然たる富木上人の銅像が右手に經を握つて立つてゐる。昔し富木氏が御住居になつた此の境内は何んとなく落付きを感じしめる。諸堂參拜の後大廣間に於て學林生心盡しの「しるこ」を御馳走になる。小憩の後最近完成した聖教殿を見物し踵をまわして特別保護建築物である四貫堂を拜觀する。五重の寶塔の彼

方には鬱蒼として繁る一本の大木がある。此の大木は宗門哀話
で有名な「哭き銀杏」である。此の「哭き銀杏」を眺めて師殿
道尊の四字がつくく胸底に響いた。祈禱道場で有名な遠壽院
に詣で諸先生、學林生諸君の見送りを辱ふし、中山を後にした
のは六時十分であつた。七時半上野驛前の「かすみ旅館」に到
着し風呂に旅の疲れを流し、晚餐の膳に向つた。折柄訪問下さ
れし、中里、勝部、森、中尾の校友と語りいつく都の夜は静か
に更けて行つた。

(六月五日) 昨日の雨空に比して今日は亦素晴らしい天氣だ
明朗な春光に心地よい觸感を覺えながら、立正大學に向つた。
八時半秋葉ヶ原驛に集合、九時二十分五反田驛着。校友三木、
柳井、古谷君が出迎へてくれる、各々丘に建てるゴシック式の
校舎の中を縫つて講堂に到り讀經の後、中條先生より當校の概
説を聞き終つて、先生案内のもとに博物館、圖書館、研究室新
築の寄宿舎等を見物した。各室の設備の完全なる校舎で健かに
學ぶ若人こそ實に羨しい。聖道に既に幾百年、而して其の教は
今もなほ當校に凜々として生氣あるを見る、吾等ばかりした完
備せる校舎を事檀建立の地祖山身延にも一つ欲しいものと思つ
た。法器完成の重大な使命を帯びてゐる我が校の教育機關が餘
りにも不完全な事を嘆はしく思はず居られない。高野にしる
龍谷にしる、乃至は天理にしる、かうした教育機關は早々に實
現してゐるのだ。

參觀後吾等は食堂に導かれ心からなる茶菓の饗應にあづかる

御多忙にもかかわらず、斯く盛大に吾等の旅の疲れを慰めて下
された諸先生並に幹事諸氏の御厚志を深く感謝し、臨滅度の聖
地池上に急ぐ。先輩、伊藤海聞師及び學林生二名立正大學までお
出迎ひ下されたのには誠に恐縮した。十一時卅分池上着、出迎の
學林生に案内され乍ら靈山橋を渡つて、此經難持坂を上り祖師
堂に詣うでる。流石黃塵萬丈の巷に浮ぶ靈地だけあつて境内は
何となく賑かきを感じしめる。山主猥下と共に祖師堂前で記念
撮影をなし、鬱蒼と茂る杉木立の間をすぎて臨滅の地、大坊に
參拜する、其の昔、日昭上人の打鳴らす臨滅の鐘の聲は崇嚴な
余韻を含んで寂かに此の林に響いたことだらう。坂を上つて直
ぐ左の窪地が御茶毘處で多寶塔の上には大きな杉が枝をひろげ
天蓋の様に、覆ひかぶさつてゐた。大廣間に於て學林生の心か
らなる中食を戴き諸堂參拜の後、記念品を澤山頂き、感謝裡に
御別れた。これより午後十一時まで自由行動なので、皆思ひ
くく大都の彼方に散つた。十一時二十分學友三木先輩並に立
正の幹事諸氏に見送られて恙がなく品川驛を出發した。

午前五時、身延着。バスに分乘し山門着仁王門前に於て一同
無事に旅行終了せるを佛祖に感謝し解散した。

終りに臨み、此度の旅行に際し各寺院並に立大の御歡待に厚く
感謝して筆を擱く。(古川宣悦記)

回文學部

幹事 岡村 正雄

☑文學部過去半歳の記録はこの「棲神」誌編纂のすべてでした、本誌廿一號はその間の消息を雄辯に物語るものと思ひます。御諒察下さい。たゞ仕事に未経験であつた爲に、このやうに豫定紙數を超過致しました。

☑苦しい体験ではありませんが、生きた勉強をさせて頂きました事を感謝致します。

☑文學部の今後への希望は、櫻榮前幹事の言に、すべてが云盡されて居る事を想ひ略します。

☑強て云ふならば現在の「棲神」發行制度は余りにも變則であつて、限りある同窓會の經濟能力では負擔が重すぎます。これでは幹事が苦しむばかりです。將來は是非共會員制度を定めたと思ひます。

☑紙數の都合上やむなく左の諸作品は發表出来ませんでした御投稿下さいました方々には誠にお氣の毒でしたが、お許し願ひます。

漢詩

短歌……はらから

立教開宗の意義

新らしき女性の進むべき方向

求道者の旅

祖廟中心主義

同窓會々報

いづれも皆傑作でしたが本誌の紙數超過を御覽下さいまして悪からず御諒承下さい。

☑憎まれ役は誰でも嫌ですが八方美人になれませんでした。

同窓會文學部へ寄贈書籍

- 觀山學報
- 龍谷學報
- 大崎學報
- 史學論叢
- 鶴道林
- 求道
- 短歌「山柿」
- 立正大學新聞
- 雜誌十二種、新聞十三種
- 觀山專修院
- 龍谷學會
- 立正大學內宗學研究會
- 立正大學史學會
- 池上學會
- 求道會
- 山柿會
- 身延教報社

同窓會文學部寄附者芳名

- 金一封
- 金五圓也
- 金貳拾圓也
- 金拾五圓也
- 金貳圓也
- 金五圓也
- 金貳圓也
- 金貳圓也
- 金壹圓也
- 院長 院下
- 中村 執事殿
- 本院 山師殿
- 學院 教師殿
- 太田 執事殿
- 荒木 義榮殿
- 某氏(注：某氏の姓名は伏せさせていただきます)
- 石井 要宏殿
- 大澤 惠宏殿
- 以上